

故郷第五場面 読んだ読んだ

ある寒い日の午後、わたしは食後の茶でくつろいでいた。表に人の気配がしたので、振り向いてみた。思わずあつと声が出かかった。……わたしは身震いしたらしかった。悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた。わたしは口がきけなかった。



主人公はルントウと再会した。しかし、その姿は昔と全然違い、顔は黄ばみ、深いしわが畳まれ、目は赤く腫れ、血色の良い丸々とした手は、節くれ立ったひび割れた松の幹のようになった。また、古ぼけた毛織りの帽子をかぶり、薄手の綿入れ一枚を身につけていた。このようなルントウを見た主人公はどう口をきけばよいのか分からなくなり、「ああルンちゃん―よく来たね……」としか言えなかった。ルントウは「私」に会えた喜びと身分の差を実感した寂しさが顔に表れ、うやうやしい態度に変わり、「だんな様……」と言った。「私」とルントウの間には、身分の差、生き方、考え方の違いである、悲しむべき厚い壁があった。

くん

主人公はついにルントウと再会した。急いで立ち上がり、迎えたことから、主人公とルントウは、主従関係をも超えていた存在だったのだらう。久しぶりに会い、ルントウの見た目がすっかり変わっていても、すぐルントウだと分かった場面からも、これは言えるだろう。主人公は上から下までルントウを見た後、少し戸惑いながら、「ああルンちゃん―

三年二組

氏名

よく来たね……」と言った。主人公の頭の中では、幼少期の思い出がかけめぐり、言いたいことがたくさんあった。が、それは口から出ることはなく、また、ルントウは何をどう言うべきか、どんな態度で話すか、迷いに迷った後、「だんな様……」と、はっきり言った。主従関係を超えられたのもう昔の話で、今は、もう前のようにではいられないのだと主人公は悟った。

さん

主人公はルントウと再会して、過去のさまざまな記憶が思い出された。しかし、ルントウはその頃から大きく変わり、貧しくなってしまったということを理解した。それに加え、うやうやしい態度で「だんな様」と言われたことで、家を売らなければいけないことに加え、昔のようにふれあえないことへの悲しみが主人公の心を覆った。

くん

主人公は、人の気配がして急いで立ち上がった。その客は、かつての親友のルントウだった。しかし、思っていたルントウとは違い、黄ばんだ顔色で、何ともみすばらしい格好をしていた。そんな姿を見て、主人公は素直に喜ぶことができなかった。あんなに待ちわびていたルントウなのに。ルントウも、昔のことを覚えているとは思いますが、立場の違いに気づき、場をわきまえた。ルントウの外面は変わってしまったが、内面は昔のまま「神秘の宝庫」のままなのか、次の場面が楽しみである。

くん